

# KEY わーど

第 84 回

## 人生の楽しみと通船計画のダイナミズム 兼葎堂の師匠、大坂を闊歩す

大坂と関係が深い文人が、郡山藩(奈良県大和郡山市)の柳沢淇園(1703~1758)である。本名の里恭を中国風に柳里恭の呼称でも知られる。

経歴は華々しく、五代將軍綱吉の御側用人・柳沢吉保(1658~1714)の筆頭家老の次男に生まれる。「忠臣蔵」の当事者でもある吉保は、時代劇で悪役にされがちだが、文化至上主義を進め、長崎の通訳に学んで中国語を話せたという。

淇園も多才で、「人の師たるに足れる芸十六に及ぶ」(『近世崎人伝』)を謳われ、新しい傾向の中国絵画を積極的に学んだ。享保9(1724)年、藩が甲府から転封された郡山にきた。

しばしば大坂にも訪れる。“なにわ知の巨人”と讃えられる少年時の木村兼葎堂に強い影響を与え、天満橋を見下ろす石町(中央区)に宿をとって、『金魚賦註』など数々の著述に序文を与えた。「住吉の祭見んとて浪花にしばらくやどりせし折から」(『狂歌かみみやま』)とあり、住吉にも足を伸ばしている。長堀橋の豪商の娘で後の三好正慶尼とも交流し、正慶尼が主人公の松井今朝子「奴の小万と呼ばれた女」(2000年、講談社)にも登場した。

一方「京大坂ニ拙者懇意之福人多く」と書簡にあるように、顔の広さを頼られ、藩のため大坂の富商からの資金融資にも飛び回った。金貳百五拾兩、元銀三拾五貫目などの数字が史料に連なり、現代ならば数千万円相当の工面を重ねていたようである。

実現しなかったが、晩年の宝暦6(1756)年から進められた播州但馬間の通船計画も面白い。日本海から大坂へ物資を運ぶ北前船の航路を短縮するため、播州を流れる市川と但馬を流れる円山川を運河開削と陸路で連絡する計画で、資金援助に加わった。

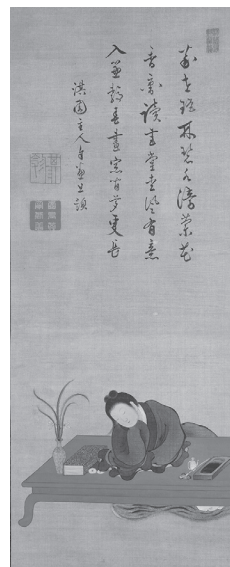
書簡には、北前船の遭難による「日本之損」を憂え、計画実現が「万世の大益、諸国民之利」「諸国之益、人民之為」であると力説する。郡山藩士の枠を越え、日本全体に思いをはせるのは、幕政の中心にいた柳沢吉保の薫陶を少年時代に受けただけのことはある。

だまされて「明日損をして乞食」になっても後悔せず、「君之為を聞いても、国之為を聞いても、世之為を聞いても、人之為を聞いても、契然としてあわれともかなしいともおもわず、只金銀を握りつめて離すことなく利欲ニのミふける人」を非難する。自分の利益、金銭の損得しか考えない現代人には耳の痛い言葉である。

こう書くと、社会派の堅苦しい人物にもみえるが



「近世崎人伝」に描かれた柳沢淇園。客を好んで郡山の屋敷から返さなかったという伝説を絵画化している。



柳沢淇園「睡童子図」個人蔵

決して違う。上級藩士のプライドは崩さないが、泰平の世を満喫し、諸芸に遊んで人生の喜びをかみしめるエピキュリアンでもあった。

淇園の絵で私が好きな画題が「睡童子図」で、「手習するつくえは、いかにも長くはゞ廣きよし」(『ひとりね』)と自ら随筆に書いた朱塗机に、うたた寝する童子を描く。

ほかほか暖かく、どこか懐かしい。勉強中のいねむりを戒める雰囲気もない。童子への優しいまなざしには、少年時代への感傷さえ感じられる。

今年は中学・高校の同級生らが自分たちの還暦を祝う会を開くという。早生まれの私は、まだ一年早いと突っ張っているが、「睡童子図」を見ていて学生時代のことがよみがえってきた。明石藩の儒者・梁田蛭巖によると淇園は酒は飲まな、酒豪である自分の倍はしゃべったという。未成年で酒は飲めなかったが、そんな感じでしゃべる奴もクラスにいた。

半世紀ぶりの特別展「柳沢淇園-文雅の士・新奇の画家-」は近鉄奈良線・学園前の大和文華館で開催中(11月12日まで、TEL 0742-45-0544)。

### 筆者プロフィール

橋爪 節也 はしづめ せつや

大阪大学総合芸術博物館前館長／大学院文学研究科教授。1958年、大阪生まれ。東京芸術大学大学院修了。大阪市立近代美術館建設準備室学芸員を18年間つとめ現職。専門は日本美術史。展覧会では「没後200年記念木村兼葎堂-なにわ 知の巨人-」「北野恒富展」「没後80年記念佐伯祐三展」などに携わる。編著に「大坂イメージ増殖するマンモス/モダン都市の幻像-」(創元社)など。